

2018 年度

国 語
(3 期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 45分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

人間は生まれますと家族とともに生活をして成長してゆきます。社会生活は家族との生活から始まります。

しかし、すこし大きくなってきますと、子どもは同じ年ごろの子どもといっしょに遊ぶようになります。友だちができるわけです。^①〈子ども〉と〈友だち〉とこの二つのことばづかいに気をつけましょう。「子ども」の「ども」とは、どちらかと言えば、親から見て自分の子を未熟な者と見て下に見る感じですが。しかし、同じ子どもであっても、他人の子どもに対しては、親もすこし敬意を表して「子たち」と言います。そのように、「たち」には、一種の敬意の気持ちがあります。

「友だち(たち)」の「たち」にもそういう気持ちがあります。もし「子ども」の「ども」を使って友だちを「友ども」と言いますと、なんだか見下したかのような感じとなり、とても仲よくやってゆけないでしょう。

そのように、相手に対して敬意の気持ちを持つ、このことによって、同じ年ごろの子どもたちが友だちとなってゆくわけです。

「友」という漢字の原形は「𠃉」^②です。これは手を取りあつて助けあう、仲良くするというところから来ています。そうした仲の良さとは、上下の関係ではありません。左右の関係すなわち平等の関係なのです。

では、左右をつなぐものは何でしょうか。上下の場合ですと、結びつけるものは、年齢^{ねんれい}であったり、力であったりしますが、左右はそのようなものではなくて、相手に対する信頼^{しんらい}です。中国古典では、それを〈信〉と表現しました。朋友(友人)^{ほうゆう}には信です。「信」とは、ことばと行動とが一致する^{いっち}ということ、つきつめれば〈まごころ〉ということでしょう。

『論語』の中には、Aの弟子たちの間のさまざまな友情が語られています。

【注】書き下し文

曾子曰く、吾日に吾が身を三省す。人の為に謀りて忠ならざるか、朋友と交わりて信ならざるか、習わざるを伝えしか、と。

【注】原文

曾子曰、吾日三省吾身。為人謀而不忠乎、与朋友交而不信乎、传不習乎。

〈学而篇四〉

【現代語訳】

曾先生の教え。私は毎日〔主題を変えては〕いろいろと反省する。(たとえば誠意の問題についてのときは)、他者のために相談にのりながら、いい加減しておくようなことはなかったかどうかとか、友人とのつきあいで、ことばと行いとが違っていないかなかったかどうかとか、「例えるならば、薬の調合で」まだ十分に身につけていないのに〔調合して〕他者に与えてしまったかどうかとか、というふうにある。

【書き下し文】

曾子曰く、君子は文を以て友を会し、友を以て仁を輔く。

【原文】

曾子曰、君子以文会友、以友輔仁。

（顔淵篇二四）

【現代語訳】

曾先生の教え。教養人は学芸を通じて友人とまじわり、その友情によつてたがいに人格を高めることを助け合う。

（加地信行著 『ビギナーズ・クラシックス 中国の古典 論語』より一部改変）

（注1）書き下し文…【原文】の言葉の順序を変え、【原文】にはない「て、に、を、は」を加え、日本語らしい読み方にした文。

（注2）原文…【原文】の横に振られてゐる「一二」の記号は、左下に「一」のついている字を先に読み、「二」のついている字や熟語（「三」省）に返つて読め、という意味の記号。また、「レ」の記号は、一字下からもどつて読め、という意味の記号で、レ点という。

問一 ———線①「子ども」と「友だち」とこの二つのことばづかひに氣をつけましょう」について答えなさい。次の文は「ども」と「だち」を使つて呼ぶときの意味のちがいを本文にそつてまとめたものです。（Ⅰ）・（Ⅱ）に当てはまることばを、それぞれ指定された字数に合わせて答えなさい。

「ども」と呼ぶ場合、（Ⅰ…五字以内）という意味がこめられており、「だち」と呼ぶ場合は、（Ⅱ…三字以内）がこめられている。

問二——線②「敬意の気持ち」とありますが、「敬意の気持ち」を表わす言葉を敬語といえます。次のア～カで使われている敬語の種類は何ですか。尊敬語ならA、謙讓語ならB、丁寧語ならCを、それぞれ答えなさい。

ア 先ほど先生はそういうにおっしゃった。

イ 君の言うことは、私には理解できません。

ウ 講演で話していただいたことを記録しよう。


エ 次の火曜日におうかがいしたい。


オ Aさんがお読みになった本はどれだろう。

カ ケーキが焼けたので、どうぞ召し上げ。

問三——線Ⅰ「敬」Ⅱ「省」について、本文中での意味に合う、この字の訓読みを答えなさい。ただし送りがなをふくめて全てひらがなで書くこと。

問四——線③「漢字の原形」とありますが、次の【A】【B】の漢字の原型と説明にふさわしい漢字はどれですか。後のア～カからもっともふさわしいものを一つずつ選び、記号で答えなさい。

【A】 草や木がしだいに成長して、上に伸びる様子をかたどる。

【B】 火が人の上にある様子をかたどる。

ア 先 イ 出 ウ 本 エ 早 オ 末 カ 光

問五 — 線④「手を取りあつて助けあう、仲良くする」とありますが、そのために必要なものは何ですか。本文中から五字以上、十字以内でぬき出しなさい。

問六 A に入る人物は誰ですか。次の中からもつともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 杜甫 とほ イ 孟浩然 もうこうぜん ウ 孟子 もうし エ 孔子 こうし オ 李白 りはく

問七 — 線⑤「習わざるを伝えしか」は、 — 線部⑤「伝不習乎」を、日本語の読み方にした文（書き下し文）です。

この文や、他の文を参考にして、 — 線部⑤「伝不習乎」に「レ」（一字下からもどって読む記号）をつけた次のア～オのうち、正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 伝_レ不_レ習_レ乎。

イ 伝_レ不_レ習_レ乎。

ウ 伝_レ不_レ習_レ乎。

エ 伝_レ不_レ習_レ乎。

オ 伝_レ不_レ習_レ乎。

問八 — 線⑥「不忠乎」とありますが、この言葉の説明としてふさわしい部分を、本文中の【現代語訳】の中から正確にぬき出しなさい。

問九 線⑦「文を以て友を会し、友を以て仁を輔く」について答えなさい。次のア～カは、この教えを具体的に説明したものです。——線⑦

の教えに当てはまるものに○と、当てはまらないものには×と、それぞれ答えなさい。(ただし、すべて同じ記号で答えてはいけません。)

ア 参考書を買うお金が足りず、困っていたら、姉が気持ちよく残りのお金を払って買ってくれた。その気持ちにこたえようと、一生懸命勉強したら、クラスで一番の成績を取ることができた。

イ クラスメートのAさんが、もう着なくなった服で、わたしが「すてきね」とほめたことがあった服をゆずってくれた。お礼に彼女が好きな置物をあげた。

ウ 一緒によく勉強をしていたBさんが転校してしまったが、転校後も勉強や友人関係の悩みを手紙で相談してくれた。私も自分の悩みを打ち明けながら、何度も文通して励まし合った。

エ 勉強がよく出来るCくんのが本当に好きだったので、「将来結婚してほしい」と手紙に書いて送った。すると、「わかった」と言ってくれた。

オ 作文コンクールに応募するため、クラスメートのDさんと一緒に放課後、図書室で色々な本を調べた。その結果、見事コンクールで入賞することができた。

カ 絵画を勉強しているクラスメートのEさんは、コンクールに自分の絵を出した。それを見て感動した私は、絵を描きたいと思い、彼女と一緒に絵を描くことにした。

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

眼鏡店を経営している父親をもつ「僕」は、息子が眼科医となることを願う母親の希望に沿って私立中学を受験し、合格した。そのころの「僕」は、野球と女の子のことしか頭にない普通の中学生だった。入学して二か月ほどが過ぎたころ、「僕」は、地面に布を敷き、手作りの縫いぐるみを買っている老人と出会った。オオアジクイやツチブタなど、かわいくない縫いぐるみばかりが並んでいた。「僕」はその中で、頭が腹に埋まり、丸まって冬眠しているヤマネが気になった。また、老人が売っている縫いぐるみはすべて片方の目しかなく、老人の左目も見えない状態なのに気付いた。お金を持っていなかった「僕」はそのまま老人と別れたが、三週間後に再び会った。

さまざまな思いが湧き上がってきたが、僕は何一つ口には出さなかった。どういういきさつでこういう商売を始めたのか、若い頃は何をしていたのか、家はどこか、家族はいるのか、なぜ左目が見えなくなったのか。今から考えればいくらでも聞きたいことはあったはずなのに、何の質問もしなかった。

やはり僕は何も考えていなかったのだ。目の前にいる老人にも過去があり事情があるなどとは思ってもせず、生まれた時からずっと石段の一部のようになって縫いぐるみを買っている人なのだろうと、ほんやり信じ込んでいた。あの頃の僕はただ、訳も分からず縫いぐるみを見つめるばかりだった。

「これ、まだ売れてないんだね」

僕はどうしても気になる冬眠中のヤマネに手を伸ばした。埃を吸い込んで前より幾分黒ずんでいたが、他の動物たちに比べ、その丸い形はとて素直で安心できた。

「うん、そうだ」

唇に張り付いた煙草の粉を摘み取りながら、老人は言った。どうにかすれば腹に埋まったヤマネの表情が見られるのではないかと、縫い目の隙間から覗き込んでみたが駄目だった。

「これ、いくら？」

「値段か？ ええつと……ちよつと待てよ……」

老人は煙草をくわえたままヤマネを片手でつかみ、一段と深く首を傾け、その球体をクルクル回転させつつ右目に近づけた。

「確かどこかに値段を書いておいたはずなんだが……」

その間左目はどろんとしたまま関係のない方を向いていた。

「いや、別にいくらだっていいんだけど」

煙草の火がヤマネに燃え移るのではないかと僕は気が気ではなかった。

やがて雨が来て、「僕」は老人と別れた。去っていく老人の後ろ姿は、縫いぐるみたちと同じようにみすほらしいものだった。

結局、三度めに会った時が最後になった。七月の終わり、梅雨が明けてすぐの暑い日曜日だった。

路面電車を降り、イギリス山が見えはじめてすぐ、様子が普段と違うのに気付いた。石段のあたりに人だかりがし、ひどくざわついていた。とつさに、老人に何かあったのではという嫌な予感がして僕は駆け出した。

大きな声を上げる人、機材を組み立てる人、やたらと動き回る人、見物する人、とにかく大勢の人々が入り乱れる中をかき分け、老人の姿を探すと、彼はいつもの場所で、騒々しさの渦とは無関係に店開きしていた。四隅の石も縫いぐるみたちも粉ミルクの空き缶も同じだった。老人の無事と、冬眠中のヤマネがやはり売れ残っているのを確かめ、僕は安堵した。

「ねえ、一体何の騒ぎ？」

「知らん」

老人は一切興味がなさそうだった。

「これだけ人が集まっていたら、売れるかもしれないよ、縫いぐるみ」

A

その時、一人の男が僕の肩を叩いた。

「ねえ、君」

不寐で馴れ馴れしい感じの若い男だった。

「時間ある？」

「えっ……」

僕が戸惑っていると男は早口にまくし立てた。

「ちよっと付き合ってくれないかなあ。予定してた参加者が急に来られなくなって困ってるんだ。やっぱり画面一杯に人が映っていないと、絵にならないから。いや、別に難しいことじゃない。実に単純。石段を駆け上がるだけの競走だよ」

「石段を？」

「そう。おじいちゃんをおんぶして」

「ここにいないじゃない」

男は老人を指差した。マッチをすろうとしていた老人は手を止め、ぐるりと首をひねって右目で男を見上げた。

いいえ、違います。この人は僕のおじいさんではありません。それに僕はこれから野球の試合があつて、ゆっくりしている時間はないんです、と説明する暇も与えられないまま、僕と老人は追い立てられ、群集の中に引っ張り込まれた。

「とにかくね、おじいちゃんを背負つて。よーいドンの合図で石段をてっぺんまで。それだけのことだから。頼むよ、お願い」

確かに年寄りを背負つた若者が数組、石段の下で準備し、その周りをテレビ局のカメラやレポーターや新聞記者や野次馬が取り囲んでいた。「イギリス山サマーフェスティバル」と書かれた横断幕も目に入った。いろいろな人の手に押され、^②否応なく僕はスタートラインに立たされていた。そして気付いた時には、背中に老人が載っていた。

老人は温かかった。骨がゴツゴツしていたけれど、それが僕の体の窪みに上手くはまって納まりがよかった。冬眠中のヤマネの頭と尻尾が、腹の内側でびったり寄り添い合うのに似て、どこにも無駄な隙がなかった。首に回された腕も、脇の下から伸びる両足も、バランスを乱さないようにじつと縮こまり、それでいてお尻は、僕の体の振動に素直に身を任せていた。

☆ 予想より石段はずっと急で長かった。絶え間なく蟬の鳴き声が渦巻き、足元には木漏れ日が一杯に広がっていた。下のざわめきが遠ざかるにつれ、空がぐんぐん近づいて見えた。一片の雲さえもないのに、あまりにも強い日差しで、白っぽく煙ったように見える空だった。

体中の痛みと胸の苦しさは高まる一方だったが、辛くはなかった。バットのヘッドスピードを上げるために鍛錬した筋肉たちが、老人を背負い石段を駆け上がるために懸命に役目を果そうとしている様が、目に浮かんでくるようだった。荒くなってゆく呼吸と老人の息。僕の汗と老人の汗、石段を蹴る靴と宙に揺れる足、それらがすべて一つに重なり合い、もはや区別などできなくなっていった。

自分と老人の輪郭は今、つなぎ目なく一つにつながり合っている、と僕は感じた。背中にいる、名前も素性も知らない他人が自分の一部になり、自分もまたその他人に含まれている。そのことが分かった。

③ 自分が生涯で初めて、僕が本当に何かを分かった瞬間だった。外の世界であらかじめ用意されていた決定事項が偶然飛び込んできたのではなく、自分の心が本当のことを生み出した瞬間だった。最後の石段が、僕たちのすぐ目の前にまで近づいていた。

結局僕たちは何位だったのだろう。そんなことはもう忘れてしまった。最後の石段を登りきったところで、皆バタバタと崩れ落ち、もはや誰が誰の背中に載っていたのかさえ判然としない状態になってしまったが、老人だけはゴールしたあとも尚僕の背中にしがみついていた。ようやく皆の息が整い、バラ園の中央広場で上位チームに賞品が授与される頃になってもまだ、僕たちはそのままだった。油断をするな、レースは続いていくのだと信じているかのように、老人はいつまでも僕の背中から離れようとしなかった。ふと自分の足首を見た時、一キロのおもりを巻いたままだったのに気付いた。僕たちに賞品は出なかった。



「ひどいね」

「まあ、こんなもんだ」

僕と老人は、野次馬たちが蹴散らした縫いぐるみと一緒に拾い集め、ひっくり返った粉ミルクの空き缶を二つ、元に戻した。靴跡で汚れた白い布は、いくら払ってもきれいにならなかった。

「なくなったのではない？」

「ああ。全部ある」

僕たちは一個一個縫いぐるみを並べ直した。どれも列をはみ出さないよう、注意深く位置を定めた。

「これを、礼に……」

不意に老人が冬眠中のヤマネを差し出した。

「お前にやりたいんだ」

「お礼を言われるようなこと、僕、何もしてないよ」

「俺をおぶってくれたじゃないか」

「それは……」

「この俺を、その小さな背中に……」

老人が泣いているのに気付き、僕は驚いた。どうしていいか戸惑い、自分まで泣きそうになった。

「いいんだよ。そんなに言ってくれなくて」

僕は老人の腕をさすりながら顔を覗き込んだ。右目からも左目からも等しく涙が流れていた。

「泣かないで。お願いだから」

老人の目から涙がこぼれ落ちるのを、僕はじっと見つめていた。^(注) 検眼鏡を覗く親父のように、息を静め、そっと瞳に近づき、この上もなく大事なものを目の前にした気持で、老人の目を見守った。

「だからヤマネをお前に……」

「うん、分かったよ」

すっかり黒ずんだ丸い塊を僕は受け取った。

「ありがとう」

それがその日、僕が獲得した賞品だった。以来、冬眠中のヤマネの縫いぐるみはずっと僕のそばにあった。高校を卒業するまではバットケースの中に、大学受験の時はお守りと一緒にポケットの中に、アパート暮らしの時はキーホルダーにあった。磨き布が親父の一部であり、鍵の音が母

の一部であったのと同じく、この縫いぐるみが僕の一部だった。

⑥ 僕は眼科医になった。もちろん、母が望んだからではない。そうすべきだと、自分で分かったからだ。

(小川洋子著 『人質の朗読会』より一部改変)

(注) 検眼鏡……視力の検査をする器具。

問一 —— 線①「僕は安堵あんどした」とありますが、ここから僕がヤマネを気に入っていることが分かります。なぜ僕はヤマネを気に入っているのですか。説明しなさい。

問二

 に入る会話はどのようなものですか。もっともふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えな

さい。

ア ああ、そうだといいな

イ それで、君は買ってくれないのか

ウ では、気合を入れよう

エ もう、こんなに人がいてこまったな

オ さあ、どうだか

ア 僕のおじいちゃんはもう、ずっと以前に…

イ 急に言われても、時間がないので…

ウ 何をすればいいのかわからないな…

エ 分かりました。まず何をすればいいですか？

オ おじいちゃんをおんぶなんていやです

問三 — 線②「否応なく」の意味として、次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 無意識に
- イ いやいや
- ウ むりやり
- エ とつぜん
- オ ますます

問四 — 線③「自分の心が本当のことを生み出した瞬間」とありますが、どのような瞬間だったのですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 暑い夏に、老人とともに汗をかきながら階段をのぼることできずなを感じた時こそ、もういない自分の祖父を重ね合わせ、老人と家族のきずなで結ばれた瞬間だったということ。
- イ 身体は大変だったが、老人を背負って階段を駆けあがることで一体感を感じた時こそ、自分の努力で初めてもたらされた、人としてとても大切なものを得た瞬間だったということ。
- ウ 今まで話すだけだった老人を背負って走った時にぬくもりを感じた時こそ、ヤマネの縫いぐるみを思いだし、この老人が大切な存在だとあらためて感じた瞬間だったということ。
- エ 気持ちはずらかったが、老人とレースに参加することで達成感を感じた時こそ、今まで自分の意志で何もしてこなかった僕にとって、貴重な体験ができた瞬間だったということ。
- オ 老人とともに走った時に不思議なつながりを感じた時こそ、今まで孤独を感じていた自分のさみしさを取り去ってくれて、本当の仲間ができたと感じた瞬間だったということ。

問五 ☆★の間で、擬人法が用いられている一文があります。その始めの五字を答えなさい。

問六 ——線④「ふと自分の足首を見た時、一キロのおもりを巻いたままだったのに気付いた」とありますが、この一文が入ることでのどのような効果がありますか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一キロのおもりを感じさせないほど、僕が石段を登ることに夢中であったことを表す効果。
- イ 一キロのおもりを感じさせないほど、僕にとって老人のからだが重かったことを表す効果。
- ウ 一キロのおもりを感じさせないほど、僕の野球の試合に行けなかった強い後悔を表す効果。
- エ 一キロのおもりを感じさせないほど、僕が毎日野球の練習をしていて持久力があることを表す効果。
- オ 一キロのおもりを感じさせないほど、僕の体力が暑さと老人によって限界であったことを表す効果。

問七 ——線⑤「この上もなく大事なものを目の前にした気持で、老人の目を見守った」とありますが、このときの僕はどのような気持ちだったと考えられますか。僕の気持ちを説明した文としてもっともふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 左目の不自由な老人が、両目から涙を流す思いがけない様子を見て、この老人のことを、両目が見える自分の本当のおじいさんと重ねて、いとおしく見守ろうとしている。
- イ 左目の不自由な老人が、両目から涙を流す思いがけない様子におどろき、自分の行動が見えなかった老人の目を治したことに気づき、ほこらしく感じている。
- ウ 左目の不自由な老人が、両目から涙を流す思いがけない様子に感動し、自分の行動が今までがんだった老人の気持ちをゆるませたことに満足感を覚えている。
- エ 左目の不自由な老人が、両目から涙を流す思いがけない様子をいとおしく思い、自分の行動が孤獨な老人に感動をあたえたことをしっかり受けとめようとしている。
- オ 左目の不自由な老人が、両目から涙を流す思いがけない様子から、自分が気に入っていたヤマネの目と老人の目を重ね、老人のことをより大切に思えるようになっていく。

問八 — 線⑥「僕は眼科医になった。もちろん、母が望んだからではない。そうするべきだと、自分で分かったからだ」について答えなさい。

(1)「母が望んだから」眼科医になるということは、「僕」にとってどのようなことですか。文中から二十一字でぬき出しなさい。

(2)「僕」が眼科医になった理由はどのようなものだと考えられますか。本文をふまえて、自分の考えを書きなさい。

問九 本文中に登場する「老人」と「僕」の人物像についての説明として、もっともふさわしいものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ぶっきらぼうで、他人と関わらないように見えるが、心が優しく素直に気持ちをおぼせる人物。

イ ぶあいそうで、とっつきにくいが、一度心を開くと相手の話を真剣に聞くことができる人物。

ウ 周りのことに興味がなく、自己中心的な考え方をしているが、困っている人に対しては優しい人物。

エ 思ったことを口に出せないことがあるが、相手の気持ちに優しくよりそうことができる人物。

オ 自分のことを話さず、人の話を聞いてばかりいるが、いつも自分の意志を強く持っている人物。

カ 行動を起こすことが苦手で、周りに流されやすいが、いざという時に大きな力を出せる人物。

〔三〕

(1) 次の――線部について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ直しなさい。

- ① テストで実力をハツキする。
- ② ごケンシヨウにお過ごしですか。
- ③ クリスマスのゲキを上演する。
- ④ 試合の前の心ガマエが大切だ。
- ⑤ おばあさんが(1)機を(2)オる。
- ⑥ 酸いもあまいもかみ分ける。

(2) 次のA～Cの四字熟語の意味として、次の中からもっともふさわしいものをそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

【A】こえう興越同舟 【B】馬耳東風 【C】だ竜頭蛇尾

- ア 始めは盛んで、終わりがたいしたことはないこと。
- イ 仲の悪い者同士が同じ場所に居合わせること。
- ウ 表面だけりっぱで、中身がともなわないこと。
- エ 目的を達成するため、長い間苦しい努力をすること。
- オ 人とぶつからず、うまく物事を進めること。
- カ どんな意見や批判も聞き流して、とりあわないこと。
- キ 役に立つことは、遠くからくるといふこと。